

藩校教授松崎慊堂と豪商山崎農園 —掛川の名望家山崎家の原点—

Prof.Kodo MATSUZAKI and Wealthy Merchant Shinen YAMAZAKI

中山 正清
Masakiyo NAKAYAMA

(平成28年10月4日受理)

【要旨】

明治時代から昭和戦前期まで、静岡県内有数の地主だった掛川町（現掛川市）の山崎家。その地主化の端緒となったのが、江戸時代後期の19世紀前半に山崎家4代目当主だった万右衛門（農園と号す）による掛川城南西の小笠山北麓の開発であり、この開発に当たっては掛川藩校教授の松崎慊堂の提案と助言があったと考えられる。

本稿は、新たに見つかった農園の文章「栗谷納芻處記」と『慊堂遺文』（1901年刊）ⁱ 所収の慊堂の文章「栗谷蔵草舎記」を比較することで、農園が土地開発に乗り出した経緯を明らかにするとともに、農園以後の山崎家もこの地の開発に力を入れている様子を示す。

はじめに

昌平黌の林述斎門下で佐藤一斎と並び称せられ、蛮社の獄（1839年）で捕らえられた渡辺華山の助命に尽力したことで知られる松崎慊堂は、掛川藩校教授として藩内の多くの人士と交流があった。その中で、慊堂の弟子で藩校教授の後任海野士黙（予介）は別格として、山崎農園との親交が目を引きⁱⁱ。

掛川城下で油商人として財をなした山崎家の4代目当主で農園と号した万右衛門は、安永3年（1774）の生まれで慊堂の3歳年下になる。掛川藩をはじめいくつかの藩の御用商人にもなっている城下有数の豪商である。

慊堂と農園の関係は、これまでは慊堂が江戸に建てた羽沢山房に農園が資金援助するなど、農園が慊堂のスポンサーだった点だけが注目されていたⁱⁱⁱ。しかし、慊堂の提案と助言によって農園が小笠山北麓で土地開発に乗り出したとすれば、慊堂が農園以後の山崎家の地主化を方向付けたということもできる。農園にとって慊堂の存在は、これまで考えられていた以上に大きな存在だったとみることができるであろう。

掛川市南西郷に、農園の子で6代目当主の万右衛門が安政3年（1856）に建てた山崎家本家の屋敷（通称・松ヶ岡）が残っていて、現在は市の指定文化財となっている。市はこの屋敷の保存と活用を目指して『松ヶ岡プロジェクト』を進めている。筆者は松ヶ岡の屋敷で開かれている勉強会に参加させていただき、本稿はその成果の一部であるが、文責はすべて筆者にある。

一、名望家としての山崎家

(1) 『松ヶ丘山崎家略譜稿本』について

本題に入る前に、山崎家の歴代について記した『松ヶ丘山崎家略譜稿本』^vについてみておく。同書は、南西郷村村長なども務めた郷土史家袴田銀蔵（鷹邨と号す）^vが記した未刊本で、跋には「昭和十七年十月松ヶ丘山崎家より家譜調査を委嘱せられ」たとあり、山崎家が鷹邨に依頼してまとめられたことがわかる。跋の末尾に「排列当を得ざるも一時未定稿として一本を松ヶ丘に提出し、下書を家に残す。後々補正すべきもの也。昭和十九年八月」と記されているように未定稿である。

筆者は鷹邨のご子孫（掛川市在住）から跋にいう「下書」をお借りし、以下に参照させていただいた。山崎家は戦後の農地改革によって多くの土地を手放し、昭和31年（1956）には東京に移転したが、この過程で多くの文書が処分されていた可能性が高いと考えられる^{vi}。本稿が、松崎慊堂の文章とともに『松ヶ丘山崎家略譜稿本』の記述や引用史料を多用しているのは、上記のように、山崎家の文書の多くが失われているとみられ、一方で、同家の依頼でまとめられた同書には貴重な史料が掲載されているためである。

(2) 山崎家略史

山崎家は油商人として財をなし、農園の祖父の時代には掛川藩の御用商人を務めていた^{vii}。農園も掛川藩の御用商人として五人扶持を賜り苗字を許されただけでなく、駿河田中藩から三人扶持、遠江横須賀藩から五人扶持を賜った^{viii}。山崎家の経営には不明な点が多いが、農園の頃には油商人というよりも、金融業者の側面を強めていたと考えられる。農園の晩年から死後にかけての文政から天保頃に、山崎家が金や米を貸し付けた相手先と額などを記した「萬覚」（天保7年正月吉日付）^{ix}には、前述の諸大名、中泉代官所、掛川藩士、村役人など幅広い層の貸付先が記載されていて、同家が金融業に力を入れていたことがうかがわれる^x。

農園の跡を継いだ5代目（万右衛門）は若くして死去、弟の6代目（万右衛門）は嘉永4年（1851）に屋敷を西町から南西郷の現在地（松ヶ岡）に移転しているが、この頃には油商を止めていたらしい^{xi}。

7代目の徳次郎の代、明治元年（1868）に掛川藩が下総芝山に転封となると、徳次郎は藩に貸し付けていた債権を土地に替えたり、近隣の田畑や三方原・遠州奥山、大井川上流、伊豆天城の山林など多くの土地を得た^{xii}。徳次郎は同3年に隠居して弟の千三郎が跡を継ぐ。

明治28～29年に掛川町長^{xiii}を務める千三郎は、明治13年に掛川銀行を創設して頭取に就任。同23年の第一回衆議院議員選挙のとき、千三郎は直接国税8万数千円を納めていたが、これは静岡県下で第2位の納税額であり^{xiv}、山崎家は県下有数の資産家であった。

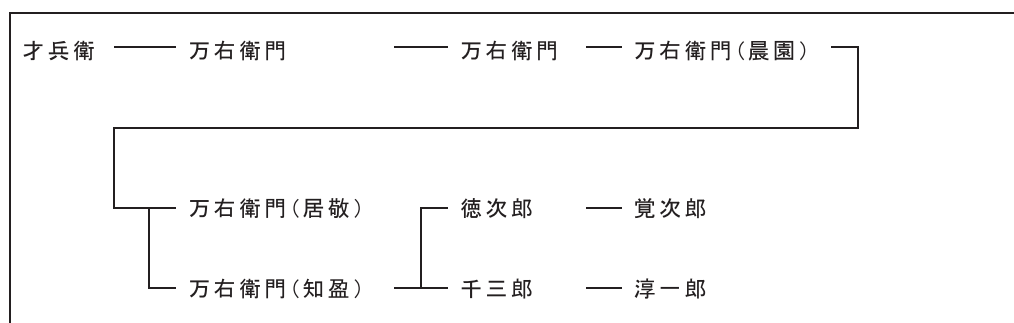
この千三郎が、掛川の名望家として知られる人物である。明治19年に東海道鉄道（現在の東海道本線）計画が持ち上がると、東遠地方の海岸沿いに敷設するという計画に千三郎らが反対し、東海道の宿駅があった掛川を通すように上申して実現させた。千三郎はこのほか、掛川町と南部の交通の便を図って青田隧道を開削したり、教育、衛生その他さまざまな分野に多額の寄付をするなど、掛川町の振興に尽力した。

さらに、実現は千三郎の死後に持ち越されたが、大井川の水を掛川まで引く疏水計画を立てるなど、先見の明もあった。しかし、千三郎は明治29年（1896）に42歳の若さで死去^{xv}。跡を継いだ淳一郎は、町民の親睦組織「庚戌倶楽部」を結成して愛郷心の育成に努めるなどしたが、大正2年（1913）に31歳の若さで死去した^{xvi}。

千三郎が就いた公職についてみると、掛川町長のほか所得税調査委委員など各種委員があるが、『松ヶ丘山崎家略譜稿本』^{xvii}によると、千三郎は「斯かる名誉的地位に恋々たるを悦はず、一意公衆の利便国利民福を祈るを以て念とせしか故に」、いったんは就任を受諾してもまもなく辞任したという。

なお、隠居した徳次郎は私塾を開いて近隣の子女の教育に務め^{xviii}、その子覚次郎は東京帝国大学経済学部長などとして活躍した。

山崎家略系図（カッコ内は号）



二、農園の栗木谷開発と慊堂

次に、4代目当主山崎農園が始めた土地経営について、松崎慊堂との関わりと併せてみていく。

（1）慊堂の掛川初訪問

掛川藩主太田資愛に招かれて享和2年（1802）に藩校教授となった^{xix}松崎慊堂は、江戸の藩邸で講じていたが、文化2年（1805）に初めて掛川を訪れた。このとき雨乞いのため（7月16日）と降雨のお礼のため（同月26日）に小笠山に登った^{xx}藩主太田資順に、慊堂も従ったらしいことは、慊堂が同年9月に作った「題小笠山新眺図後」に小笠山の様子や同山からの景観が詳細に記されていることによって、うかがうことができる。

慊堂がいつ江戸に戻ったかは不明だが、翌文化3年に慊堂は「農園記」^{xxi}を作っていて、これが慊堂と農園の親交を示す最初の文章である。「農園記」には、藩主から「農園」と記した書を拝領した山崎万右衛門が、その出典である朱熹の詩の意味を慊堂に尋ね、慊堂が解説したことが記されている。

万右衛門が慊堂に質問したのが文化3年とすれば、このとき万右衛門は33歳。後述するように学問好きな働き盛りの豪商が、年齢のさほど違わない碩学の丁寧な説明を受けて感銘している様子を思い浮かべることができる。それまで「民猷」と号していた万右衛門は、これ以後「農園」の号を使うようになった。

(2) 慊堂作「栗谷蔵草舎記」

松崎慊堂と山崎晨園の親交が始まって間もない文化5年(1822)に、晨園が栗谷という土地で新田開発に着手したということが、慊堂が文化12年に作った「栗谷蔵草舎記」^{xiii}にみえる。長くなるが、以下に、山崎昌弥氏(掛川市松ヶ岡プロジェクト推進委員会委員)による書き下し文を示す。

栗谷蔵草舎記 山崎晨園に代りて

甲戌冬十月。草舎を小笠山陰の栗谷に作る。高丘に憑りて以って面勢す。闌闌を去ること僅か里餘り、醇圃大いに異なる。余初めて此の地に遊ぶや、客有りて余に謂いて曰く。此の荒蕪を闢き、以って稲田と為す可しと。余は水を埭く無きを以って之を難しとす。客曰く。尾人善く開墾す。其の效隣国に於いて著し。今能く招致し、隆を削り平と為し、塘を築き段と為し、處を極めて池を構へ、之を水源と為さば、唯閑壤に稲梁を生やすのみならず、猪鹿遠のき、狐兔遁る。而して村田の旁に在るものは、また其の齟齬蹂躪の患を免れ、而して其の餘瀝の所沾し漑ぎて必ず廣がる。又能く萬緡を捐て土人を僦はば、土人の貧、また足り以って賑わう。何如と。余大いに之に然り。是に於いて尾人と従事す。春より夏まで、殆んど百餘日。朝霧夕露、敢えて廢を厭わず。前に指さし後に畫き、村人力を勸せ、時に酒食を齎し、相與に勞勉す。農隙に及ぶ毎に復た然り。凡そ墾田七十畝を得る。其の間一たび成って一たび毀れ、且つ瀟して且つ漏る。前後八年、始めて能く緒に就く。乃ち山腹を鏟り、屋三間を作り、奴の淳なる者を擇び、婢を配して以って居す。遂に蔵草舎の擧る有り。夫農は草を刈り、夏秋に雪を峙えるを以ってする。春時嫩緑の未だ肥えざるの前に當り、之を水田に散じ、以って養禾の資と為す。此の陝陋にして之を峙えるの地無し。乃ち屋を後丘の上に就す。其の蕪を芟り、其の頂を削り、屋を將って之を蔵める。地既に高爽にして、觀る所益々曠なり。練原右に引き、淡山左に峙つ。沃野東に連なり、治城西に延びる。而して岳蓮の萬仞、儼として其の間に當り、聯風輝を含み、雲霞卷舒して、旦夕百變す。余は心竊に之を楽しむ。以為らく、徒に之を蔵草の處に委ねるは、造物者の含羞を為すに非ざるかと。暮秋にして蔵め、仲春にして散ず。苟も散草の際を借り、以って觀游の處と為す。また何をか農事を害さん。是に於いて舎を作る。其の制矮小にして、在を擇ばず、巧を呈さず、邑中の廢宅を買い、以って之を料と為す。既に成る、樸は淳、粗は雅たり。舎の東南、松梅桃桜を以って樹え、又苗杉数千を蒔く。名づけて栗谷蔵草舎と曰う。維余は陋巷の小民、先人の薄産を頼り、銖銖を累積し、以って小安を致す。また幸いに士君子の棄てる所とならず。頗る読書を知り、孝友睦婣の義を講ず。今より以って始めるに、三時散草の餘、良辰美景に遭い、事罕務間の日、親戚故旧及び士君子の辱臨と余は、斯の丘の上に於いて諷詠游衍す。或は桑麻を論じ、或は文義を講ず。濁酒數行、園味一盤、以って佳景に酬ゆ。遣洪抱。興到りて詞暢び、相與に邦君の渥澤を頌え、吾が生の暉虞を楽しむ。此れ実に余の鄙願なり。天はまた幸に眉壽を以って假す。婚嫁の縁畢り、家事を致すに佳兒佳婦、老を此の中に投じ、逍遙優游を得、以って暮年を娯しむ。則ちまた何をか尚わんや。詩に曰わざるをや。夙に興き夜に寝ね、汝の所生を忝むる莫れと。また曰く、今我樂まざるば、日月其れ除らん、已だ太に

たのし
康む無かれ、職として其の居を思へと。職として既に勤むるを思い、少楽を以って
すべきかな。苟職として之を思い勤めず、而して専ら観游の適を謀るは、是れ則ち
敗門落戸の事なり。而して余は似たる無しと雖も、また免れるを知る。子孫之を識
る。遂に其の顛末を記し、併せて余の志を叙ぶ。以って壁中に實く。
文化乙亥秋九月

(※太字部分については後述)

要約すれば、「客」が農園に「栗木谷に新田を開発すべきだ」と勧め、「尾張の人（尾人）が開墾の技術に優れているので、招いて溜池を造って用水とすればよい」とアドバイスをした。70畝（7反）の田を開くのに前後8年かかったが、ようやく完成し、肥料用の草を貯える小屋を建てた。この場所は、城下を一望でき栗ヶ岳、さらには富士山も望める景観のよい地なので、粗末な別荘を建てて「栗谷蔵草舎」と名づけた。私（農園）は必死に働いてきたのでここで晩年を楽しむが、子孫はまず家業に励まなければならない、といった意味になるろう。

（3）栗谷の位置

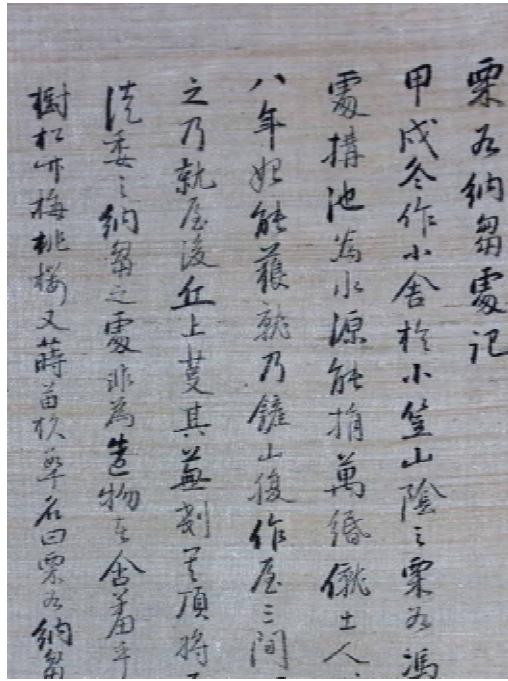
では、この栗谷とはどこなのか。掛川市久保（旧南西郷村）に栗木谷（くりのきや）という小字があり、そこには二筋の狭い谷があって畑として利用され、それぞれの谷の奥には溜池の堤が現在も残っている。この谷の口に住む八十代後半の女性やその家族の方々によると、溜池の下谷筋は以前、水田だったという。また、谷の口から東の丘に登ったところの尾根（一帯は現在茶畑）を「ほようば」と呼んでいるという。また、この女性は「嫁いできた当時、八畳程度のコンクリのようなものが敷かれていた」と話してくれた。ここからの眺望は、現在は杉林によってさえぎられているが、林の間からは掛川城や市街地、栗ヶ岳、掛川市北方の山々を望むことができ、よく晴れた日には富士山も見えるという。

栗木谷の地形や眺望は「栗谷蔵草舎記」の記載に一致しているということができる。また、「ほようば」は「保養場」の意味、「コンクリのようなもの」とは別荘の土間の三和土だったと考えられることから、同記の記す新田開発と別荘の建設はこの栗木谷で行われたことは間違いないであろう。

（4）新出の「栗谷納芻處記」

栗谷の場所は特定できたが、「栗谷蔵草舎記」の内容をそのまま受け取るのには疑問がある。70畝の新田を開くのに、尾張の専門業者を雇って8年もかかるものなのだろうか。この疑問を解消するのが、2016年春に掛川市教育委員会が市内の山崎家分家から寄贈のあった史資料の中から見つけた「栗谷納芻處記」（以下、「納芻處記」と略す）である。文の末尾に「山崎農園 旭」（旭は農園の実名）とあり、農園が作った文章である。

〔栗谷納芻處記〕（部分）



この「納芻處記」と慊堂作の「栗谷蔵草舎記」（以下、「蔵草舎記」と略す）と比較すると、前に示した「蔵草舎記」書き下しのうちの太字部分が、「納芻處記」にはない個所である。太字部分以外にも用いている文字の違いが何箇所かに見られるが、大きな意味の違いはない。例えば、蔵草舎は草を貯蔵する小屋、納芻處は刈った草^{xxxx}を収納する場所という意味で、ともに肥料用の草の貯蔵所という意味では同じとみてよいだろう。

これに対し太字部分は、「納芻處記」に登場しない「尾人」が「蔵草舎記」には記されているという点で大きな違いが見られる。「尾人」とは尾張の人という意味だが、尾張国知多郡には、各地に出稼ぎに行って新田開発など土木工事に従事する「黒鍬」が多かった^{xxxx}ので、尾張から招いた黒鍬のことと考えられる。

「納芻處記」に「尾人」が登場しないのには、次のような事情が推測できる。農園は「客」の勧めに従って栗木谷の開発に着手したが、「尾人」を雇わずに地元の者だけで事業を進めたところ、「一たび成って一たび毀れ、且つ瀦して且つ漏る」、つまりいったん完成したと思ってもまた水が漏れ出す、というありさまだった。そこで「尾人」を雇い、やっと完成させることができたが、足かけ8年もかかってしまった。

「客」の助言に従わないで「尾人」を使わずに事業を進めようとしたことにきまりのわるさを感じた農園は、「納芻處記」に「尾人」のことを記さなかったのではないだろうか。一方、農園から「納芻處記」を見せられた慊堂は「尾人」の活躍をよく理解していて、「納芻處記」を添削した「蔵草舎記」に「尾人」のことを書き加えた。

とすると、農園に栗木谷の開発を勧め「尾人」を雇うように助言した「客」とは、慊堂だったと推測することができる。栗木谷は小笠山への途中に位置することから、慊堂は藩

主に従って小笠山に登った際にこの地を見ていた可能性は十分にある。また、農園が栗木谷開発に着手したのは、「納筥處記」「葺草舎記」によれば文化甲戌（文化11年）の8年前つまり文化4年で、この時には既に、前述したように農園と慊堂の親交は始まっている。

慊堂は肥後国益城郡北木倉村（現熊本県御船町）の生まれで、父は伊勢国白子から同村に流れて来て小さな農家の家に婿に入った^{xxxv}という。農村出身ということで農地に関する知識があり、幼少時に父の出身地の隣国尾張の黒鋤について聞いたことがあったのかもしれない。

慊堂は後年、「余も亦た老農なり」と『慊堂日暦』天保5年6月2日条^{xxxvi}に記していて、研究者からも「慊堂の自己意識は、やはり「老農」であろう」^{xxxvii}と評価されている。儒学者として高く評価されるようになってからも、農家の出身という意識は終生持ち続けていたようだ。農園に対する栗木谷開発の提案は、慊堂の老農意識によるのであろう。

三、農地開発の拡大

（1）マストラ池の築造

栗木谷の開発を終えた農園は文化14年（1817）冬、栗木谷の南に位置する小笠山山腹にマストラ池の築造を始め、翌年初夏には完成させた^{xxxviii}。完成まで数ヶ月しか要していないのは、栗木谷で雇った黒鋤の技術に今回も頼ったのだと考えられる。

南西郷村庄屋らが天保7年（1836）3月にマストラ池の修復について藩に報告した文書によると^{xxxix}、文化14、15年の築造の際に埋桶などに必要な木材は周囲の藩有林から調達することを許され、完成後は藩から手当として米90俵を農園らが賜っている。完成までに必要な費用は農園だけでなく、村松龜右衛門^{xxxix}という町人も賄っていたことも、同文書は記している。

この文書と同年の文書^{xxxix}に、マストラ池修復に関わった「尾州玄鋤 茂八」という者が山崎万右衛門（6代目）に宛てて「金78両を確かに受け取った」という内容のものがある。尾張の黒鋤が修復に関わったことを示す文書だが、築造に際しても黒鋤が関わっていたことを推測させる史料でもある。

農園はその後、文政3年（1820）にマストラ池からの用水を利用できる角田（旧南西郷村）という地に、乙吉、藤助という2人の農民を移住させ、その功を藩主太田資功から賞せられて2幅の「耕作図」を拝領した^{xxxii}。農園の子孫は、毎年正月にこの耕作図を床の間に飾ったといい^{xxxiii}、山崎家にとってこの開発は記念すべき事業だったことがうかがえる。

農園は翌文政4年にも同地に久蔵、嘉七、忠次という3人の農民を移住させている。農園は移住者に家の建築費用を与え、移住に必要な費用を無利子で貸し付けるとともに、宅地の地代を免除する^{xxxiv}という手厚い奨励策を取っていた。

農園はその後、文政9年にもマストラ池近くの山麓に道路を造ったり、トンネルを掘るなど地域の住民の交通の便を図った。同12年9月に農園は死去しているが、藩主資始はこの年の12月に農園の溜池築造の功を賞して跡を継いだ5代目万右衛門に紋付熨斗目を贈っている^{xxxv}。

掛川藩にとって農園の大きな功績は、マストラ池の築造とその下流の開発だったことが、これによってわかる。さらにいえば、マストラ池築造に必要だったのが栗木谷開発の経験だっ

たわけで、それを提案、助言した慊堂の役割は大きなものだったといえよう。

マスラ池は小笠山北麓の中腹にあるが、それより下には宮側池、西沢池、小滑池、与左衛門池、古池、寺ヶ谷池などマスラ池以前に造られた溜池が多くある^{xxxvi}。しかし、これらの溜池があったにもかかわらず新田開発が進まなかったのは、貯水量が少なすぎたり堤が崩れやすいなどの問題があったのではないだろうか。農園が黒鍬の力を借りて築造したマスラ池は、これらの問題点を克服していたのであろう。同時に、農園が手厚い優遇策を取って農民を移住させたことが、この地域の開発に大きな進展をもたらしたのである。

(2) 農園死後の開発事業

山崎家は農園の死後も、この地域の開発に力を入れ、天保5年(1834)には6代目の万右衛門の弟(農園の四男)がこの地に分家。天保7年には前述のようにマスラ池を修復している。

さらに嘉永年間には大橋円十、田辺嘉平、朝比奈富蔵の3軒を移住させ、藩主から「移住によって荒廢地を回復させた」として褒賞された。文政年間に移住した計6軒はいつのまにか退転したが、大橋、田辺、朝比奈の3家は現在まで続いている。

山崎家によるこの地域の開発がどれくらいの面積だったのかを示す史料は見当たらないが、ある程度推測できる数字がある。『元禄 天保 明治 遠江石高表』(1983年、磐田市誌編纂委員会・磐田市誌編纂室発行)によると、天保期の南西郷村の石高は493.214石だったのが、明治2年頃には612.533石と100石以上増加している。米1石を収穫できる水田の面積を1反とすれば、天保から明治初年の間に10町余りが新たに開発されたことになる。

約10町のうちどの程度が山崎家による開発かはわからないが、マスラ池の恩恵を受けた新田が多くを占めたとみることは許されよう。なお、この期間中に佐野郡内で100石以上石高が増えている村は他に西郷村だけで、掛川藩が山崎家の開発事業を褒賞した理由をこの数字からもうかがうことができる。

山崎家はその後も元治元年(1864)に6町5反2畝の新田を横須賀藩領の弁天西古川跡に開くなど新田開発を進め、また、「藩への金子を調達する過程で設定された抵当物件としての土地が抵当流れによって万右衛門の家に集積されるといったさまざまな形成過程」^{xxxvii}によって県内各地の土地を集積。幕末から明治初年にかけて「水田36町、畑11町、山林10町余で、これを耕作する小作人は合計320余人」にのぼった^{xxxviii}という。

四、農園の隠居と慊堂の羽沢山房

(1) スポンサーとしての農園

次に、藩校教授致仕(文化11年)後に松崎慊堂が江戸に建てた羽沢山房に対する、山崎農園の援助について、これまでの研究に何点か付け加える。

鈴木瑞枝著『松崎慊堂』^{xxxix}は、慊堂が文政5年(1822)に作った「与書山崎農園」^{xl}によって、山房の建設費用は総額約1,300でそのほとんどが「賢者のおくゆかしい贈り物」つまり寄付によるもので、そのうち農園の援助額が1,210にのぼっている。この数字の単位について同書は「両だと少々多すぎるからおそらく銀で匁であろう」とし、農園の寄付した1,210匁は「大体二百両である」と換算している。

山房については『慊堂日暦』にも記載があり、そのうち天保3年（1832）11月15日条^{xii}には「この山房の土地はもと万右衛門のものだったが、何人か所有者を替えた末に慊堂のものになった」という意味のことが記されている。この万右衛門とは農園またはその父の3代目当主を指すと考えてよかろう。とすれば、この土地を慊堂に斡旋したのは農園だったのではないだろうか。山房建設に対する農園の寄与は、金銭援助にとどまらなかった可能性が高いのである。

では、農園が羽沢山房建設に関わったのはなぜか。農園は文政5年5月8日、慊堂に手紙を書いて近く隠居する意向を伝えるとともに、「苟も世の微益とも相成り候事を生涯の業」にしたいと抱負を述べ、具体的に①心学を興隆させたい②『群書類従』を編纂した塙校校（保己一）にならい、慊堂を総裁として江戸に「修史の場所」を設けたいと記している^{xiii}。

つまり、農園は羽沢山荘を国史編纂の研究機関とするつもりで、約200両を寄付したことになる。慊堂はこの山房を修史ではなく^{xiii}、唐の開成2年（837）の開成石経（石に刻んだ儒教の経典）の校訂作業などの場に行っている。この『縮刻開成石経』の刊行は「慊堂一代の最も大きな学問的功績」^{xiv}であると評価されており、農園が期待していたのとは異なる分野だったかもしれないが、大きな業績を上げたという点では、慊堂は農園の期待に応えたといえるであろう。

農園は文政6年（1823）正月に隠居し、同年6月には羽沢山房に慊堂を訪ねている。これは隠居の挨拶というだけではなく、前年の慊堂宛て手紙に書いた抱負の実現に向け、慊堂と相談するためだったのではないだろうか。ただ、『慊堂日暦』には、慊堂や農園が墨田川に遊んだり、高橋景保の天文台を訪ねて測量機器を見学したといった記事^{xv}しか見えず、農園の抱負について慊堂がどのように応じたかをうかがい知ることはできない。

（2）慊堂が農園に贈った「錢本草」

『慊堂日暦』文政8年（1825）10月7日条^{xvi}に農園と金銭についての興味深い記述があるので、ここで触れておく。唐の張説^{xvii}が著したという「錢本草」という文章を慊堂が入手し、農園に贈った記事である。

それによると、慊堂が入手した「錢本草」には「錢は味は甘く、大熱には有毒」で始まり、「もし積んで散ぜざれば、すなはち水火盜賊の災の生ずるあり。もし散じて積まざれば、すなはち飢寒困厄の至るあり。一積一散する、これを道と謂う」「博く施して衆を濟う、これを仁と謂う」「出だすに期を失わざる、これを信と謂う」など金銭の適切な扱い方が説かれている。

慊堂はこの文を写した上で、「農園老友は頗るこの薬を蓄う。つねに使用垂方を懼る。因って一通を写して贈る」、つまり農園はすこぶる金を蓄えていて、常にその使い方を気にしているので「錢本草」を写して贈る、と記している。

豪商農園が、その財を社会のために使いたいと常に考えていたことをうかがわせる記述である。

（3）慊堂と農園、最後の宴

ここで、これまで見てきた以外の慊堂と農園の交流を記しておく。農園は文化9年

(1812)に山崎家の祖で曾祖父の才兵衛(法号・定地)の墓を整備した^{xlviii}が、それに伴って慥堂に才兵衛を顕彰する文の作成を依頼。慥堂は「山崎定地君碣陰記」^{xlix}を作った。

文化13年6月に慥堂は駿府に山梨稲川を訪ね、三保、久能山、清見寺など駿府近くの名所に遊び、翌7月には稲川らと富士山に登っている。このとき晨園、晨園の妻の兄である藤枝の小島蔵六らが同行しているという¹。

文政6年(1823)正月に隠居した後、晨園が江戸に慥堂を訪ねていることについては前述した。一方、慥堂は弟子の狩谷楳斎とともに文政9年9月に掛川に赴き、晨園のもとを訪れている。『慥堂日暦』の同年9月23日条には「晨園の窪沢の別業におもむき、益良池に遊び、松菌(まつたけ)の羹を食す。美なること甚だし。夜、窪沢に宿す」とある。

「晨園の窪沢の別業」とは、慥堂が「栗谷蔵草舎」と呼んだ前述の別荘のこと。晨園が築造したマヌラ池にも行っている。2人が親交を深めるきっかけとなった地で、名産の松茸を肴に夜遅くまで酒を酌み交わした様子が目に浮かぶような記事である。

なお、『松ヶ丘山崎家略譜稿本』にも、「文政九年の日記帳に五世万右衛門君の筆蹟を以て左の記事あり」という記述の後、9月23日の条に「江戸松崎先生楳斎先生御招に付山田側につれ隠居様若旦那様御揃一夜御泊」^{lii}と引用している。この記事の「山田側」は久保沢の地にあり、「晨園の窪沢の別業」「栗谷蔵草舎」に当たるのは明らかであろう。

同月25日には慥堂は晨園宅に泊まり、28日夜にも晨園宅に立ち寄っている。翌29日に掛川を発って江戸への帰路についたが、このとき晨園は煙草入れ(烟袋)、晨園の跡を継いだ万右衛門(居敬)は金4分を餞別として慥堂に贈っている。

晨園は文政12年9月23日に死去(享年56)しているので、おそらく2人が最後に会ったのは、この文政9年9月だったであろう。

五、晨園後の山崎家と慥堂

晨園死後、『慥堂日暦』に山崎家関連の記事は急に減っている。前掲の羽沢山房の土地がもとは万右衛門のものだったという記事のほか、天保4年(1833)4月1日条^{liii}の「慥堂、晨園の徒半七と晨園の墓碣について議す」、同年9月13、17両日条^{liv}の万右衛門が慥堂を訪ねた記事ぐらいである。

山崎家では、天保3年に5代目の万右衛門が享年25で死去し、その弟が6代目を継いで万右衛門と称す^{lv}という代替わりがあった。一方、慥堂は宮川藩(堀田家)、西条藩(松平家)など諸大名家への出講^{lvi}や門人の育成、蛮社の獄(天保9年)への対応^{lvii}、将軍家慶への謁見(同13年)^{lviii}など60代後半から70代になるまで多忙をきわめていたため、山崎家との交際も途絶えがちになっていたようだ。

しかし、晨園の孫で6代目当主だった徳次郎は、慥堂と山崎家の親交に強い誇りを抱いていたらしい。徳次郎の息子で東京帝国大学経済学部長などを務めた覚次郎は、慥堂90回忌の法要で「父は常々お前が学問をするのは慥堂先生から学問の貴いことを教えられたから、お前に学問をさせるのだといていた」と話した^{lvix}という。また、徳次郎は『慥堂遺文』編纂を企てて途中で死去したが、覚次郎がその企画を継いで完成させている^{lx}。

前述のように、千三郎が掛川町の振興にさまざまな分野で取り組んだことも、慥堂が晨園に贈った「錢本草」に記されている「博く施して衆を済う、これを仁と謂う」「出だす

に期を失わざる、これを信と謂う」などの考え方が影響しているのかもしれない。

松崎慊堂が校閲した『掛川誌稿』^{vi}を、山崎家本家がそれまで「家宝のように大切にしていた」^{vii}ということも、同家にとって慊堂が大きな存在だったことを示している。山崎家の名望家としての活躍は慊堂の薫陶によるものと考えられるであろう。

おわりに

山崎家は、掛川の発展への貢献が大きかったとされるわりに、その歴史に不明な点が少なくない。本稿は、有名な儒学者松崎慊堂と山崎家との関係を詳細に示し、同家のその後の発展に果たした慊堂の役割について、ある程度明らかにできたと思う。

また、儒学者や心学者を指す「道学先生」という言葉が「道德にかかわって世事に暗い学者、道理に偏して融通のきかない頑固な学者をあざけていう語」^{viii}として使われるが、慊堂の場合は農地開発という世事にも通じていて、道学先生とは異なる実践的な人物であることの一端を本稿で示すこともできたのではないだろうか。

現在、「松ヶ岡勉強会」は山崎家関係の史資料の目録作りを進めており、その作業を通じて山崎家や慊堂に関する新たな知見をさらに導き出したいと考えている。「松ヶ岡勉強会」メンバーは、註viでお名前を挙げた岡本春一、横山茂両氏、『松ヶ丘山崎家略譜稿本』所蔵者や漢詩に詳しい山崎昌弥氏をご紹介いただいた小澤吉造氏（松ヶ岡を愛する会代表）、さまざまな史料を提供していただいた佐藤四郎氏、史料の読解などに意見をいただいた和田厚・常葉大学非常勤講師、松本一男・前掛川市教育次長らの皆さんであり、勉強会の取材に快く応じてくださった方々と併せて深く感謝したい。

註

- ⁱ 本稿で『慊堂遺文』は『国立国会図書館デジタルコレクション』による
- ⁱⁱ 『掛川中学校校友会誌』第20号（大正8年）所収「掛川藩校教授松崎慊堂翁」（野崎安太郎著）は、「（慊堂）翁の藩に在るや、官人には四宮雪窓、郷土には山崎晨園尤も親交あり」（003コマ）としている。なお、本稿で「掛川藩校教授松崎慊堂翁」は『鷗外文庫書入本画像データベース』による。
- ⁱⁱⁱ 前掲「掛川藩校教授松崎慊堂翁」003～004コマ、鈴木瑞枝著『松崎慊堂』（研文出版、2002年刊）196、198、207ページ。
- ^{iv} 本稿で「松ヶ岡」の表記は掛川市のプロジェクト名に従ったが、同書は「松ヶ丘」と記している。
- ^v 『掛川市誌』（掛川市、1968年刊）によると、明治9年（1876）年に生まれ、西南郷村長などを務めるとともに郷土史の調査研究にいそしみ、昭和42年（1967）死去。
- ^{vi} 『掛川市史』編纂に携わった岡本春一氏によると、江戸時代の山崎家の大福帳が漆漉し用に使われたという話があったという。また、長く山崎家住宅の管理をしていた横山茂氏によると、一家が東京に引っ越す直前、骨董商が多くの物を引き取っていたという。
- ^{vii} 『松ヶ丘山崎家略譜稿本』「山崎家の榮譽」節に引用された、掛川藩が下した文化13年11月25日付の文書に「祖父以来御用向出精相勤候二付苗字御免被成下之」とあり、晨園

の祖父の代から藩の御用を務め苗字を許されていたことがわかる。

なお、『松ヶ丘山崎家略譜稿本』にはページが付されていないので、本稿ではページ数の代わりに節を記した。

- viii 『松ヶ丘山崎家略譜稿本』「第四世山崎万右衛門君事蹟」
- ix 松ヶ岡山崎家住宅蔵
- x 『掛川市史』中巻（掛川市、1984年刊）776ページによると、山崎家5～6代の頃、掛川特産の葛布を主に扱う新店を開き「相当の利益をあげることに成功したらしい」という。
- xi 『松ヶ丘山崎家略譜稿本』「第六世山崎万右衛門君事蹟」は「当家の油商営業は西町在住の時限りにして、南西郷へ移籍後は同商を廃したるものの如し」と記し、6代目の万右衛門の代に油商は廃業したと推測している。
- xii 『「松ヶ岡プロジェクト」の背景と構想』（掛川市、2014）1ページ
- xiii 正式には「掛川町南西郷村組合町村長」（『松ヶ丘山崎家略譜稿本』「第八世山崎千三郎君事蹟」による）
- xiv 『松ヶ丘山崎家略譜稿本』「第七世山崎万右衛門君事蹟」
- xv 『松ヶ丘山崎家略譜稿本』「第八世山崎千三郎君事蹟」
- xvi 『松ヶ丘山崎家略譜稿本』「第九代山崎淳一郎君事蹟」
- xvii 『松ヶ丘山崎家略譜稿本』「第八世山崎千三郎君事蹟」
- xviii 『松ヶ丘山崎家略譜稿本』「第七世山崎万右衛門君事蹟」
- xix 『慊堂日曆』第三巻（平凡社東洋文庫、1978年刊）天保3年2月15日条に「享和壬戌の歳、この日始めて褐を我が侯に積く」と、掛川藩主に始めて講義したことを振り返る記事がある。「享和壬戌」が享和2年に当たる。なお、本稿で『慊堂日曆』は平凡社東洋文庫版による。
- xx 『慊堂遺文』「題小笠山新眺図後」
- xxi 『慊堂遺文』「晨園記」
- xxii 『慊堂遺文』「栗谷蔵草舎記」
- xxiii 「芻」には牛馬の飼料の草という意味の他にかわいた草という意味があり（『角川漢和中辞典』（角川書店、1959年刊））、ここでは後者の意味で使われていると考えられる。
- xxiv 『角川日本地名大辞典』第23巻「愛知県」（角川書店、1989年刊）の「知多市」項は、近世に同市周辺で盛んだった農間稼ぎのひとつに黒鍬を挙げ「黒鍬は道路・溜池・砂防などの土木工事を主体とした労働による出稼ぎで、三河・美濃・信濃・遠江を得意先として、畝ましとって段々になった田畑や山を一枚の田畑に作りかえる作業を特技としていた」と説明している。
- xxv 前掲『松崎慊堂』（鈴木瑞枝著）11、12ページ
- xxvi 『慊堂日曆』第四巻（1978年刊）
- xxvii 小林幸夫解説『松崎慊堂全集 解説書』（冬至書房、1988年刊）
- xxviii 『松ヶ丘山崎家略譜稿本』「第四世山崎万右衛門君事蹟」
- xxix 同上
- xxx 天保7年のマサラ池修復には晨園だけが費用を出していることから、亀右衛門はこの間に手を引いていたと考えられる。

- xxxi 『松ヶ丘山崎家略譜稿本』「第四世山崎万右衛門君事蹟」
- xxxii 同上
- xxxiii 同上「山崎家の榮譽」。晨園のご子孫である山崎良太郎、文三両氏からも、2幅の耕作図を正月に飾っていたことをお話しいただいた。
- xxxiv 『松ヶ丘山崎家略譜稿本』「第四世山崎万右衛門君事蹟」
- xxxv 同上
- xxxvi 袴田銀蔵編纂『南西郷村小史』（1918年編纂、1923年刊）
- xxxvii 前掲『掛川市史』中巻778、779ページ
- xxxviii 同書同ページ
- xxxix 前掲『松崎慊堂』
- xl 『慊堂遺文』
- xli 『慊堂日曆』第三卷
- xlii 前掲『松ヶ丘山崎家略譜稿本』「第四世山崎万右衛門君事蹟」節に手紙全文が掲載されている。
- xliii 林述斎監修の『徳川実紀』編纂が文化6年から天保14年にかけて進められていたので、慊堂自らが修史に関わるのを避けたのであろうか。
- xliv 鈴木瑞枝著『松崎慊堂』267ページ
- xlv 『慊堂日曆』第一卷（1970年刊）
- xlvi 同上
- xlvii 高木重俊著『張説』（大修館書店、2003年刊）によると、張説は宰相の地位に何度も昇った「唐の新興官僚階級の最初の出世頭」であり（2ページ）、また、「文学面では散文の大家であっただけでなく、初唐詩と盛唐詩とをつなぐ詩人」（3ページ）で、さらに文芸と学術の両面に優れ「文儒の人士を中心に積極的な人材登用をはかり、玄宗の治世を助けた」（5、6ページ）という。
- xlviii 前掲『松ヶ丘山崎家略譜稿本』「第四世山崎万右衛門君事蹟」
- xlix 『慊堂遺文』所収
- 1 『内田旭著作集』一（浜松史蹟顕彰会、1993年刊）「慊堂門人と其時代の人々（其二）」117ページ
- li 『慊堂日曆』第二卷（1972年刊）
- lii 前掲『松ヶ丘山崎家略譜稿本』「第五世山崎万右衛門君事蹟」。
この文政9年の日記の引用には、9月15日条に「四宮仲右衛門町奉行左衛門、伝左衛門、山田側へ御遊」、10月4日条に「山角武太夫様御家内中様外四五人山田側保養ニ付隠居様若旦那様御伺」とある。掛川藩士が山田側（栗木谷のある久保地区の地名）すなわち「栗谷蔵草舎」とみられる場所に遊んでいる記事がある。この記事は、晨園の別荘が藩士にも開放されていたことをうかがわせる。
- liii 前掲『慊堂日曆』第三卷
- liiv 前掲『慊堂日曆』第四卷
- liv 『松ヶ丘山崎家略譜稿本』「第五世山崎万右衛門君事蹟」
- lv 『慊堂日曆』第一～六卷の随所に大名家に出講した記事がみられる。
- lvii 『慊堂日曆』第五卷の天保10年5月15日、18日、6月1日、7月27日、8月29日の各

条に、捕らえられた崑山を心配する記事がある。

- lviii 『慊堂日暦』第六巻の天保13年10月晦条に、將軍謁見について詳しく記している。
- lix 増田実著『教育と人物』（高天神城先史研究会発行、1970年刊）「松崎慊堂の感化」3ページ
- lx 山崎覚次郎著『貨幣瑣話』（有斐閣、1936年）415～416ページに「この『慊堂遺文』が明治三十四年に出版されたとき私が之に関係したと云ふと、知人でも意外に感ずる者が稀でないが、之は事実である」「要するに、私は単に亡父の計画を継承したに過ぎないが、之が為めに当時微力を致したことは、今日に於ても欣幸とする所である」とある。また同書415～417ページには、覚次郎の父徳次郎が『慊堂遺文』編纂と併せて、慊堂の親筆を模刻した酒杯を知人に頒布するためにいくつも作らせていたことを紹介し、「亡父が非常に先生（※慊堂のこと）を崇拜」していたと記している。
- lxi 『慊堂日暦』巻四の天保7年3月9日条に「始めて老人と志稿を校す」と見えるのを最初に、同年8月9日条の「（海野石窓に）掛川志稿六冊を託す」という記事まで、『掛川誌稿』を校した記事が十数件ある。
- lxii 『松ヶ丘山崎家略譜稿本』最後のページに袴田鷹邨が記したメモ書き。
- lxiii 『広辞苑』第五版（1998年刊）「道学先生」項